番組構成試論

――農村過疎を追って――

荒牧富美江

農村の過疎、出かせぎそして若者のUターンといった一連の現象が、マスコミの話題としてとりあげられるようになってすでに久しいが、今では日本の農民、農村、農業問題を語るのにそれらを除いて考えることはできないほど大きな問題になっている。それ故これらの問題は今もマスコミに登場する頻度が多く、この一、二か月の間で目についたものだけでも、つぎの五つほどがあげられる。

10月22日放送、新日本紀行「まつり」NHK
11月14日、こんにちは奥さん「故郷に帰って――私のUターン」
11月17日付朝日新聞〃波〃「人口Uターンの一面」
12月1日付毎日新聞〃視点〃「若者のUターン」
12月7日放送、ドキュメンタリー「むらは今……」NHK

最初の、新日本紀行「まつり」には、家を挙げて離村していった人々が、祭りのために過疎の部落に戻り、残っている僅かな人々と祭りをして、再び都会に帰ってゆく風景があった。「こんにちは奥さん」では、NHKの調査で〃Uターン現象〃がもっとも顕著であったという富山県で、ふるさとに戻ってきた若者たちを集めてインタビューをしていた。朝日新聞一一月一七日付〃波〃欄「人口Uターンの一面」は、この「こんにちは奥さん」を視聴しての論評で、要約すると「帰郷後おもに観光関連の職業についた若者たちをとりあげて、これが世にいう〃Uターン現象〃だというのは適切でないのではないか。が反面、現代のUターンとはそんな一面もあるのか、と教えていておもしろい」といったコメントである。一二月一日の毎日新聞〃視点〃「若者のUターン」は、こうした問題を専門としているコラムニストが、Uターンした若者たちの新しいサークル活動について短い報告をしている。NHKのドキュメンタリー「むらは今……」は、山形県のある町で、収穫が済んで出かせぎに出発しようとしている農民を追ってルポしていた。

このうち朝日新聞の記事は「こんにちは奥さん」の放送に対するマスコミ自身の反応であるので別として、また毎日新聞の記事は、ジャーナリストではない専門家が書いている点で、少々性質が違うので別にすると、残る三本のテレビ番組にみられるマスコミの姿勢は、今のマスコミ自身の問題を象徴的に現わしているように私には思われた。というのは、この三本の番組をみながら、私は常に、過疎問題の本質はいったい何なのか、この番組は〃だからどうだ〃と

いいたいのかと歯がゆい思いをし続けたのである。この三本の番組をみるかぎり、この制作者たちがこれらの問題をどう受けとめ、何を訴えようとしているのかまったく不明であった。およそ番組を一本制作するには、まず企画があって、制作意図が明らかにされ、次に構成があって、それを訴える手段を考える。ルポルタージュを作るにしても、ただ単に現象をつなぎ合せるだけでは、通りすぎていく回燈籠の映像しかできない。たとえば「むらは今……」を放送した一二月七日の毎日新聞TV欄には次のような企画意図が説明されている。

「山形県白鷹町からは、今年も成人男子の三分の一、約二千人が出かせぎに行った。しかし、ここ数年、若者の出かせぎが少しずつ減り、出かせぎの五〇％以上が四〇代以上の年配者で占められるようになった。やがて、彼らも年齢的に出かせぎが無理になろう。また一方で、出かせぎは土地の荒廃も招いている。出かせぎができなくなったとき、荒れた田畑をかかえた彼らはどうなるのか。」

しかし、番組のなかには〝……彼らはどうなるのか。〟に対する答の暗示もなかった。結局は〝出かせぎ問題の現状をさぐる。〟という言葉のようにただ現象をとらえたにすぎなかった。たしかに、問題の提起という企画意図もあってよいであろう。しかし農村の過疎、出かせぎの問題が起ってすでに十年以上にもなろうとしている時、それはマスコミの十年の怠慢を示すことにならないといえるだろうか。

村から都会へ、農民が農閑期に働きに出ていく、そして現金収入を得る、若者が村をすてて都会へ働きにでる、村には老人ばかりが残っていく。村の人口はどんどん減ってついには廃村になっていく……これらのことがいったい何を意味するのか、何がほんとうの問題なのか、それはいいことなのか悪いことなのか、防ぐべきことなのか促進すべきことなのか……。過疎を如何にすべきなのか、これからの農村はどうなっていくのか……。三本の番組をみながら次々に生まれた疑問は、その一つひとつがそれらの番組の制作意図となり得たものであったと思う。たとえ、一つひとつの答はでなくても、その背景や本質を解明しようとする意図をもつべきである。

こころみに、この農村過疎、出かせぎ、それに続く若者のUターンという一連の問題に関して、背景をみながらいくつかの視点を組立ててみることにしよう。

1　経済的視点

(イ)農業農民問題として

昭和三〇年ごろから始まった日本の経済成長は、三三年にいわゆるなべ底景気といわれる不況を経験したもののその後も異常ともいえる成長率を示した。三六年一月に発表された池田首相の国民所得倍増計画はそれに拍車をかけ、高度経済成長は昨年度まで確実に続いていたのである。

農村からの人口流出は、昭和三五、三六年ごろから各地に始まった。三五、三六年という年はGNPの実質成長率が一二・九％、一五・二％という飛躍的な経済成長を遂げた年である。そのとき農村では現金収入を得るための青壮年層の長期出かせぎがはじまっていた。安達生恒氏の『〝むら〟と人間の崩壊』では中国地方の例をあげて次のように述べている。（同書一四〇ページ）

「中国山地の農村では、昭和三八年の豪雪で長期出かせぎが大量化するとともに、挙家離村が各地でおこりはじめた。製炭がまったくダメになり、和牛価格が下落する一方、生活費ことに子弟の進学費が上昇してゆくその赤字埋めの出かせぎであり、出かせぎの長期化、通年化は挙家離村を自然に誘発した。工業ベルト地帯の建設、都市の膨張、基幹交通網の整備などを主軸とする土木建築事業が、このような大量出かせぎや離村労働力を、低賃金と残業制のなかでいくらでも消化した。」

最初に出ていったのは青壮年層であった。後には都市に出ても生活が成立たない老人が残され、部落は完全な老人社会となる。人口の減った集落には電気、ガス、水道、医療などの公共設備がなくなっていく。

この現象と同時に、農業の機械化が進んでいったが、農業経営の規模拡大は遅々として進まなかった。ということは、機械化で労働力が浮く反面、農作物のコストは上り利益は薄くなる。余った労働力の担い手は農業の外で働き、また次の機械を買う……といった悪循環が繰返されることになった。こうして農業は女性あるいは老人の仕事となってゆく。

昭和四〇年代になると、一連の農作物の輸入自由化に加えて、農民を決定的に農地から引離したのは昭和四四年の米の減反政策であった。日本の農業は、米一本のところが多く、米を作るのが「農民」であり、他の作物の栽培も、米作を土台としてその上の蓄積として行われてきた場合が多かった。それが〝古米〟〝古々米〟〝古々米〟という言葉を生みだした米の過剰、休耕の奨励は、米作りを休めば政府から金がでるという奇妙な話になったのである。基礎となっていたものを奪われる形となった農民の精神的打撃は大きかった。

一方投機を目的とした資本の土地の買占めが、農村や山間部にまで広がってきたのがこの頃なのである。大企業は単に値上り待ちの土地買占めの他に、宅地造成や観光開発のための買占めも行っている。土地を売った農民と売らない農民の間のトラブルや、土地を失ってしまった農民の動揺など問題は深刻である。

(ロ)農業政策・過疎対策

これに対して農業行政は何をしてきたのだろうか。

昭和三六年に農業基本法が成立しているが、これは高度成長下の日本において、〝従来の米中心の零細複合経営をやめて、米以外の成長作目を大きく選択・拡大し、企業的自立経営を中心とした新しい農業編成の実現〟をはかるという意図をもったものであった。それには大量の零細農家の離農が前提とされ、離農した農民はその他の産業部門に吸収されることが前提となっていた。

ところが実際には、食糧の自給率が減少、農産物の輸入の増加、農産物のコスト高、他の資源の価格上昇で、いわゆる〝三ちゃん〟農業といわれた老人・女性中心の農業の比較生産性は上らず、専業農家の所得は兼業農家のそれより伸びず、この〝基本法農政〟は十年後には農林省自身が認めた失敗となった。

次には昭和四四年の経済審議会農業問題研究委員会の報告書『日本農業進歩への道』にあらわれる「農業の装置化、システム化」論である。「装置化」とは技術面における中、大型機械化、「システム化」とは食糧の効率的供給と資源有効利用のための農業管理体制の確立ということであるという。農業に工業のような方式をとり入

れて生産性を高め、農業を高度成長の路線に乗せようという政策である。

こうして、中央官庁、政府の農業政策は、農業を「工業化」すること、離農農民は工業その他の部門に吸収し、近代的な中都市を建設して過疎部落の人々を集団移転させ、農村生活を都市生活のレベルに引上げることに徹底している。これに対して地方自治体では、その地域の特産作りなど地域産業の振興、再開発計画などが考慮に入れられ、町村自治体ではもっと切実に、人口流出の防止、その対策のための国への補助要求が前面に押出されている。

農林省のたび重なる生産指導の失敗、各指導層の方針の落差は、農民の生産意欲を著しく減退させていく。高度成長下の農業政策は世界の食糧資源は世界の人口を十分にまかなうことができるという前提にささえられているのだが、果してそこに誤りはないだろうか。ビアフラの悲劇、インドの飢饉などは記憶に新しい。加えて海や河川の汚染は確実に進んでいる。化学肥料の多用による地力の低下が論議され、水田の農薬汚染、工場排水による有毒物質の水田汚染など考えると、決して安穏ではいられないという気がしてくる。それなのに、過疎や買占め、減反などで農地や山林が放棄され荒廃してゆくのである。

2　社会的視点

鉄道や道路の整備、工場の進出、土地の買占め、観光開発などによって農村の都市化は進み、農村の生活は都市生活に近づいて便利になってゆく。日本列島各地の情報の均等化も進むとなれば、日本中どこに住もうと大差なく、若者のUターンが目立つようになるのも当然であろう。現に「こんにちは奥さん」に出演した若者たちの発言にもそれがうかがえた。この若者たちのターンは、帰農、過疎部落の蘇生ということにはほとんど関連がなく、いわゆる〝ふるさと〟の意識という心情的なものが基盤であると思われた。前に紹介したが、朝日の〝波〟欄の記者がUターン現象について〝農村からでていった若者が農業にかえる〟というイメージをもっていたとしたら、ジャーナリストとしての認識不足であるといいたい。若者たちが故郷に帰るきっかけとなった要因は、おもに生活様式の差からくること、家族や友人の絆にひかれたことなどが多かった。故郷の自然の賛美も健康を問題にしての発言とは思えなかった。そして番組は、若者たちが声を合せて歌う土地の民謡でしめくくられたが、見終って結局は〝ふるさと万才〟を叫びたかったのかという感を深めさせたのであった。番組の構成からいっても、出演者に順にインタビューしただけで、五五分間という放送時間内に、その背景や内容を考えさせる意図や工夫がもう少しあってしかるべきではなかったろうか。このことはまた後にふれる。

さて、農村の都市化が進むにつれて、情報の均等化、情報社会化が進み、農業の「工業化」によって農村の管理社会化が進む。とすれば、現在大都市がかかえている問題はそのまま農村中都市に持ち込まれ、ゴミ処理の問題から、種々の公害、管理体制のなかの人間疎外まで農村の内にも浸透してゆくことになろう。その上農業は、食糧供給という本来の役割の他に、人間の環境の保全、人々のレクリエーションの場、子供たちの人間教育の場の提供といった役割までももたされることになる。現に梨もぎ、みかん狩り、芋掘りなどの観光農園の開発から、貸農園という新商売まで現われている。週

末に都市を脱けだした人々は、一キロいくらで梨をもいだり、借りた農園に自分たちで作った野菜の収穫に来たりする。都会よりは少しましな空気を吸って、わずかに土の感触を楽しんで、また都会に帰りコンクリートのなかで黙々と働く。農民は、かつて精魂こめて作物を作っていた土地に〝自然〟という名をつけて商品にし、農業は第一次産業から第三次産業へと姿を変えてゆく。

3　文化的視点

民俗学の詳細な考察を俟つまでもなく、日本人は元来農耕民族である。われわれの祖先は弥生時代から農業を営み、そのための集落を作っていた。その後二千年の間、食生活はもちろん、文化、風俗習慣、社会、およそ人間生活のあらゆる部分が農業によって規定され、影響を受けてきた。いつの時代にも農民は虐げられ疎外されてはきたものの、日本の社会の基盤は農業にあった。その農業が――時代の流れや政治体制によってもたいした影響をうけずに、脈々として続いてきた農業そのものが、今はじめて大きな変革期を迎えていることは、日本の文化史のなかで極めて重大なことではないだろうか。

米の減反、農家の経済の逼迫、日雇いや出かせぎの不安定な生活農民の敗北感、無気力。一方、土地の買占めやそれにまつわる経済的な思惑、集団離農や過疎は、農業生産単位としてのコミュニティの完全な崩壊をもたらした。それはコミュニティの風俗や習慣、歴史を含めた文化を消失させようとしているのである。その年の収穫に感謝し翌年の豊作を神や祖先に祈るというコミュニティの祭りが消えて、人々のノスタルジァに訴える単なるレクリエーションとしての〝観光まつり〟だけが年々盛んになってゆく。新日本紀行十周年シリーズの一本として作られた「まつり」は、この観光化してゆく祭りと、過疎によって、住んでいる人だけではできなくなった祭りとを対照的に描いていて印象的であった。しかし「この十年間さまざまに姿を変えてきた祭りを通して、人と〝まつり〟とのかかわりあいを考える」（一〇月二日付新聞ＴＶ欄）という制作意図からいえば、祭りというもの、そのものに対する突込みが足りなかったために、テーマである〝人とのかかわりあい〟が浮びあがらなかったのは残念であった。

われわれの生活のなかに残っている風俗も習慣も形骸化して、やがては消えていくであろう。農業を失った農耕民族、日本人の文化はこれからどうなってしまうのか、何やらそら恐ろしい気がしてくるのである。

経済、社会、文化と三つにわけて考えてみたが、それぞれのなかにいろいろな面があり、またこれ以外にも多くの視点、側面があるに違いない。すべての番組がそれぞれの主張を持たねばならぬというには、今のマスコミ界には制約が多すぎるし、また安易な主張自体は問題も多い。いま番組を制作する者がなさねばならないことはそれぞれの番組の視点をしっかりと定めて、その視点から問題を透視する姿勢を確立することである。一つひとつのシーン、あるいはエピソードの背景をしっかり把握した上で、それらをどのように組立て全体を構成していくかを考えねばならない。たとえば、

「むらは今……」では、経済問題を軸として出かせぎを追い、農民の心の動揺や社会への影響を浮彫りにしていくこともできたであ

ろう。あるいは農民の心の問題から社会との関係を考えることもできたであろう。出かせぎをみる視点を定めずあちらこちらから見ることは、かえって問題を混乱させ、訴求力を弱めることになってしまう。

「こんにちは奥さん」にしても、若者たちに同じ質問を繰返すだけでなく、都市の過密、農村の都市化、あるいは農業の今後、農村の今後の生活といった問題にまで話を進めることもできたであろうし、また彼らのUターンをふるさとの問題としてとらえ、人間のふるさととは何か、あるいは彼らによって作られる新しいコミュニティの形成を取上げることもできたはずである。

『〃むら〃と人間の崩壊』のなかで、その著者は十年前（昭和三八年頃）のマスコミの取材態度について次のように述べている。（同書一四〇ページ、前出の引用に続く）

「中国山地での集落の崩壊は、そのような経過ではじまったのだが、それをまっ先に報道したのはマスコミであった。報道の主張は、むら社会の崩壊、残留者の打ちひしがれた心象風景、挙家離村者の不安定な生活を映像に照らし、記事で訴えるという形で、すこぶる人間的視点を重視したものであった。」

ここで〃人間的視点〃とよばれているものは一つの視点として評価されるものであると思う。しかし十年経った現在、いまだに〃こんなことが今起っています〃〃時代の流れなのでしょうか〃といった主調が多すぎるのではないだろうか。記録という点ではマスコミは非力であることを考えあわせる時、十年という期間の重みを反省しなおさねばならないであろう。この十年間にマスコミはこの問題に関して何を積みあげてきたか。いつも新しいテーマをもとめて右往左往し、一つの問題に次の問題を積重ね、深く追求していく姿勢を忘れてはいないだろうか。農村過疎問題はほんの一例であって、今この社会には大きな問題がいくつもある。きのう大騒ぎでキャンペーンした問題をきょうはすっかり忘れ、またしばらくすると思い出したように騒ぎだすようなことをやめて、一つの現象を一歩一歩追い、マスコミの内側で受けつぎ蓄積していく努力をのぞみたい。その時はじめて、マスコミが真の問題提起をすることが可能になるであろう。

〔参　考〕

安達生恒著「〃むら〃と人間の崩壊」（三一書房）
富山県企画室編「山村過疎地域対策資料」（昭48・7）
籠瀬良明他著「高度成長下の都市と農村」（古今書院）